

# 河口信任



(古河歴史博物館提供)

元文元年(1736) - 文化8年(1811)。肥前唐津〔佐賀県唐津市〕の生まれ。河口家は、曾祖父の良庵以来代々医者の家柄で土井家に仕える。宝暦9年(1759)、長崎に医学留学。土井利里が古河藩主になると、信任もこれに従い古河に移る。その後、利里が京都所司代になると信任も京都に移り、明和7年(1770)、藩主の許可を得て、当時タブー視されていた人体解剖を行う。2年後、脳・眼球を含む頭部解剖の成果や医者自ら執刀した解剖の成果として、日本最初の解剖書『解屍編』を出版。杉田玄白・前野良沢の『解体新書』より2年早く出版された。杉田玄白の門下生となった孫の信順に大きな影響を与える。

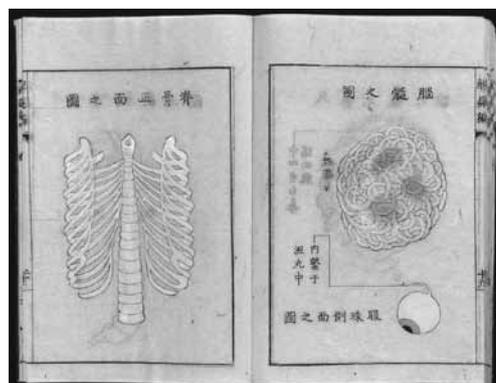
河口信任は、唐津〔佐賀県唐津市〕で藩医の子として生まれました。河口家は曾祖父の代からオランダ流医学を伝えてきた医者の家だったので、信任も幼いころから医者となることを志して勉学に励みました。

信任が21歳の時、医学の師でもあった父が亡くなります。自分の医学の未熟さを感じた信任は、長崎に留学し、栗崎道意のもとで南蛮流外科医術を学び、24歳で栗崎流外科医術の免許皆伝を得ました。

信任が仕えていた唐津藩の土井家が、宝暦12年(1762)、古河に国替えとなったので、藩主の土井利里に従って古河に移りました。古河藩医として、広く藩士や町人たちの診療に忙しい毎日を送る信任に転機が訪れたのは、明和6年(1769)、利里が京都所司代になった時です。

利里に従って京都に移り住むことになった信任は、「医学の発展のために勉強したい。」と強く願うようになり、そのころ京都で第一人者といわれた解剖学者の荻野元凱に入門します。

明和7年(1770)、藩主であり、京都所司代でもあった利里から解剖の許しを得て、先生の元凱とその門下生の立会いのもとに、ついに人体の解剖を自ら行います。解剖は信任の前にも行われたことはありましたが、いずれも医学の知識を持たない役人が、あり合わせの道具で人体を開くばかりで、医師はそれを遠巻きに見ていたに過ぎませんでした。当時、亡くなった人のからだを解剖することに対する人々の反応は、たとえ医学のためであっても、とても冷ややかなものでしたので、



解剖刀と『解屍編』(古河歴史博物館蔵)

多くの医者が自ら手を下さなかったのも、仕方がなかったことかもしれません。

長崎で学んだ栗崎流医術により、外科的な処置を身に付けていた信任は、世間の目などを気にすることなく、医学の進歩のために勇気をもって自ら解剖を行いました。特製の解剖刀で、一つ一つの臓器を取り出し、観察していきました。この時使われた解剖刀が、古河歴史博物館に展示されています。

(よし。この解剖を無駄にしないで、これを本にまとめよう。)

先生の元凱からは、解剖を世間に公表するような書物の出版はやめるように言われましたが、医学の進歩のため、信任の意思は固く、この解剖の結果を明和9年(1772)、『解屍編』という本にまとめて出版しました。解剖から2年後のことでした。この『解屍編』は、杉田玄白・前野良沢の『解体新書』よりも2年早く出版されましたが、医者自ら執刀した解剖の成果として、また脳や眼球を含む人体解剖の記録としては、日本ではじめてのものでした。今日の医学から見ても極めて正確なもので、日本の医学を前進させるために大きな役割を果たしました。

その後、信任は古河に戻ると、古河藩の御側医格となって活躍するかわら、門下生たちに余すところなく、オランダ流の医学などを教えました。後に杉田玄白の門下生となった孫の信順にも信任の教えが大きく影響しています。

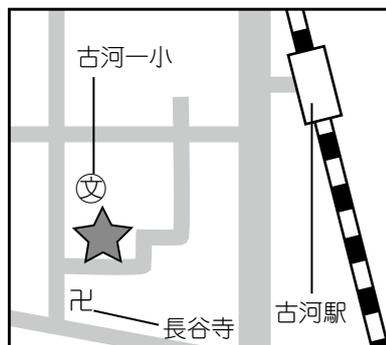
文化8年(1811)、古河城内の屋敷で75年の生涯を閉じますが、一生をかけて医学の発展に情熱を注いだ信任は、近代医学の基礎を築いた一人といえるでしょう。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 古河歴史博物館

所在地 古河市中央町3-10-56

内容 河口信任が使用した解剖刀などの資料が展示され、業績が紹介されています。



### おもな 参考文献

『郷土の先人に学ぶ』（茨城県教育委員会・1986）

『日本の解剖ことはじめ—古河藩医河口信任とその系譜』（古河歴史博物館・1998）